
二人の休日～不死鳥の羽根の下で～

隅子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の休日〜不死鳥の羽根の下で〜

【Nコード】

N2050B

【作者名】

隅子

【あらすじ】

「貴方が嫌いなんじゃない。ただ…人間が嫌い…。」膝を抱えるその姿に、放ってはおけない何かを感じてしまった…。俺様な公爵が出会った、不幸な子供の物語。ある村に滞在中の吟遊詩人が休日に二人だけで語った秘密の物語。

・プロローグ

窓から日が差刺し込む。

「ん…」

ベッドの上で、フルートはゆっくり目を開けた。ぱたんと寝返りを打つと、隣のベッドで眠るライラがいる。

起きようかな…と思い、床に降りて伸びをした。

「ふぁ…」

小さく体を震わせてから一息。

窓の外は朝靄のかかった山が並んでいる。

「朝だよー。」

相棒の顔を覗き込むが

「むー…」

ライラは小さく唸ったつきり動かない。まあ、寝起きが悪いのはいつものことなのでフルートは気にしない。

「ご飯作ろうよ。」

身体を屈めて肩をゆすると、ライラの白い腕が伸びてきて、フルートの肩に掛かった。

「？」

ぐいっ…

「わっ…!」

強く引かれて、フルートはライラのベッドに倒れこんだ。

「眠い。」

耳元で相棒の声がする。

「見ればわかるよ…。」

フルートがため息混じりに言うと、ライラは目を閉じたまま笑った。

「じゃあ、もう少し。今日は予定も無いんでしょ？」

「まあ：ね。」

「だったら問題無いよね。」

フルートに掛け布を被せ、ライラはまた寝息を立てはじめる。

（これだけ動けるなら起きればいいのに。）

もう一度ため息をつき、フルートは目を閉じた。

起きたのはお昼も近くなってから。

「……。」

ベッドから身体を起こし、目を擦っていると、相棒の声がした。

「おはよう。」

「あれ：！？」

キヨロキヨロと部屋の中を見るフルートに、ライラは悪戯っぽく笑った。

「あんまり気持ち良さそうだったからご飯作っちゃった。」

「あ：ごめん：。」

すまなさそうに首を竦める相棒を見て、ライラは心外だという顔をする。

「いいよ。たぶんこっちが引っ張り込んだんだろうし。」

「どうやら覚えていないらしい。」

「それより、早く食べよう？」

「：うん。」

二人は小さな庭に出た。

家が斜面に建っているので庭は少し斜めだが、湖を一望出来る特等席だった。

この村にとどまる条件として、ライラが村人に出した条件がこの家を貸してもらうことだったのだ。やわらかい草の上に布を敷き、二人は並んで座る。

『いただきます。』

バスケットに詰めたサンドイッチと、キノコのクリームスープ。村

人からの二人への待遇は素晴らしかった。歌いに行くたびに食材を色々とくれる。

食べ終わった頃、日差しが強くなってきたので二人は布を被った。

「美味しかったね。」

フルートが言うと、ライラは嬉しそうに笑った。

「ありがとう。」

「夕飯は私が頑張る。」

「えー、一緒に作ろうよ?」

「負けないもん。」

「意地っ張り。」

「とにかく、私が作る。ライラばかり作らせられないし。」

「はいはい…。じゃ、お任せします。」

「うん、任された。」

今度はフルートが嬉しそうに笑い、ライラはそれが面白くて嬉しくなった。

フルートは立ち上がり、湖の方を見る。

日の光を浴びた湖面はキラキラと輝きながら周囲の山を映していた。

「ね、何かお話して欲しいな。」

振り向きざまの唐突な言葉に、ライラは少し面食らう。

「え…でも…。詩は全部知ってるんじゃない?」

二人の共有物だもの。と、ライラは言いたいらしい。

「詩になってないやつ。ハッピーエンドがいいな。」

「ワガママ姫だなあ。」

「ライラもでしょ。」

即座に言い返され、多少複雑だ。

「うーん、じゃあ、いいよ。一つお話ししようかな。」

「やった♪」

フルートが裾をはためかせながらライラの隣にちょこんと座る。

「これは、昔々のお話です。とある領主様のお話です…」

1. きっかけ

「…。」

部屋で泣く娘を見ていた。

娘は声を押し殺し、静かに肩を震わせていた。

「…っ。」

無理もない。母同様に慕っていた乳母が危篤なのだ。

床にへたりこみ、涙を拭こうともしない。

儚く、可憐な姿の娘。だが、これが俺の養母だ。女神に心の半分を捧げ、不老の身体を手にした神官。

偶然、扉の隙間から見えただけの光景だった。

そつと扉を閉めようかとも思ったが、その考えが頭をよぎった時には口が動いていた。

「母上。」

「…。」

母はゆっくりと立ち上がり、俺を見た。

「…あら、いやだ。恥ずかしいところを…」

涙を拭き、無理に作った笑顔が痛々しかった。

「あの、葬儀には…」

ゆっくりと近付く。

「出られません。私は両親と、自分以上の地位の方の葬儀にしか…出られません。出られないのです！」

俺に縋りついてきた身体は本当に華奢だった。

もう、限界だと思った。

「…母上…もう、時間の環に戻って下さい。疲れたでしょう？」

細い肩に手を置いて囁いた。

「！」

驚いて見上げてきた母に、小さく笑いを返した。

「長い間、お勤めご苦労様でした。」

「そ…それは…」

「はい。」

この細い肩に、どれだけの孤独を背負って来たのだろうか？もう、十分だ。

俺は母と違って元から一人が好きな人間だから、心配なんかされなくても大丈夫。

「…本当にいいのですか？」

「もちろん。」

「ありがとうございます。…ごめんなさい。」

「謝らないで下さい。それに、不老の肉体を手に入れるなんていう経験は滅多に出来ません。いい経験です。」

「…。」

緑色の瞳が俺の目を覗き込んだ。

「もうそろそろ交代していただかないと私も皺だらけになりますし。」

「…まあ、いつまでも小生意気ですね。」

母の涙に濡れた瞳が、笑っている。

「背が、伸びましたね。いつの間にか私より大きくなって。いつの間にか、私よりしっかりして…あなたは…」

「主教、起きて下さい。主教。」

椅子に座ったまま寝ていた俺は、補佐役の声で目が覚めた。

「…昔の夢を見た。」

「申し訳ございません。ですが…」

「客か？」

「はい。追い払おうとしたのですが、立ち入り禁止の柵の前にずっと座っているのです。」

「…通せ。」

俺はそう忖げると、部屋から人を遠ざけた。

「…。」

入って来たのは子供。10歳になるかならないかくらいの姿をしている。

薄茶色の髪は短く切り揃えているが、右側の前髪は長く、顔の半分を隠している。

座り込んだと聞いたから、どんな奴かと思ってみれば…。

「レアル様！」

典型的な小姓の姿をした子供はいきなり俺の名を呼び、ひれ伏した。

「なんだ。」

多少の威圧感を与えるため、いつもより横柄に答える。

「ナイラ様をお救い下さい！」

「ナイラ？」

誰だ？

「どうかお救い下さい！」

「お前の言っている意味がわかりかねるが…」

救いを求めている民なら、それこそ嫌になるくらい沢山いる。

「…では、単刀直入に申し上げます。このたび行われる後継者選定の儀式の場に、ナイラ様を加えて下さい。」

「お前は、自分が何を言っているのか？」

俺のいる乙女宮神殿の最高責任者である主教は、結婚が許されていない。

だから主教は一族の中の子供を養子として育て、後継者とするのだ。能力を重視するので、そこにはある程度ではあるが年齢と、もちろん性別も関係無い。

判断するのは主教だけで、他の者の口出しは一切許されていない。そして、俺は主教だ。

「…はい。」

「そうか。では、この場で私が地下牢行きを命じてもいいのだな。」

「…はい。あの方を助けていただけるのでしたら。」

声が震っている。

「なるほど。」

白い天井に目を向けてみる。

「そして私はナイラとやらの興味を持ち、目を向けるようになる…と。大方、そんなところだろう。」

「…。」

「お前のような事は皆が考える。能力では一番だと、己の推薦する者を過信する。だが実際はどうだ？能力など大した差ではない。選り抜かれた者ばかりが集まるのだから。違うか？」

「…。」

やわらかな日の射す午後なのに、小さな身体は震えている。少しいじめ過ぎたか。

「あの方は、貴方様の目にすら触れないかもしれないのです。どうか、選考の場には…！」

「…。そのナイラとかいう子供は何者だ？」

「六年前、ハーフエルフと逃げた令嬢がいたのを覚えていらっしやいますか？」

「…ああ。」

微かに記憶にあった。レオネとメリックという二人が逃げたのだ。一時は騒動になったものだが、今は何の音沙汰もない。

「ナイラ様は、お二人の忘れ形見です。」

「…そうか。それは不幸だったな。」

「お二人は殺されたのです！」

「…。」

「このままではナイラ様まで殺されてしまいます！どうか、どうかお救い下さい！！私はどうなっても構いません！！」

頭を床に擦りつけて、必死に訴えてくる。

俺も、さすがに少しだけ心が動いた。

罪人ならともかく、純粋な訴えを完全に無視するのは少々辛い。

「……お前は計算高い。私の好奇心が旺盛なことを知っているな？
私は一度気になったら自分の目で確かめたい人間なのだ。

：子供を推薦する事は禁止されているが、助命の嘆願なら罪にはならんからな。」

もちろん、その子供が命を狙われているという証拠もないわけだが。

「……。」

「名は？」

「は、はい、ラトと申します。」

「こちらへ。」

ラトが不安そうな顔をして少し近くへやってきた。

「もっとだ。」

「はい。」

机を回って手が届く距離まで近付いて来た。

「その顔はどうしたのだ。」

「：お二人が亡くなった時、傷が。」

「ほう：それは惜しかったな。」

俺が手を伸ばすと、ラトはびくりと身体をすくめた。

でも、手は止めない。ゆっくりと顔にかかった髪を払い退けた。

「傷が無かったら、将来は後宮にでも入れただろうに。」

頬に、一文字に刻まれた傷跡。

「！」

ラトはあとずさった。

「：何故：わかったので：。」

途中で自分の口を押さえたが、もう遅い。

「カマをかけたただけだったんだが。」

「！」

「この程度で引っ掛かるような子供だとは。ナイラとやらの件は誰かの入れ知恵だな。」

「い、いいえ：。」

下を向いたまま、必死に首を振る。

「まあいい。下がれ。」

「リアル様…」

「考えておこう。」

「あ、ありがとうございます！」

それこそ玩具のように頭を深く下げ、ラトと名乗った少女は部屋から出て行った。

「…。」

さて、どうしたものか。

レオネに子供がいたという話は耳にしていない。
隠されていたのだろうか？

「シオン！」

部屋の外にいるであろう補佐役に声を掛ける。

「はい。」

扉が開いて、眼鏡をかけたハイエルフが歩いてきた。

「ルナリアに伝えてくれ。」

用件を書いた小さな紙を渡すと、シオンは一つ礼をして部屋を出て行った。

休憩は終わりだ。今夜は忙しくなりそうだから。

夜、風呂上がりにルナリアが候補となる子供達の名簿を持ってきた。

「リアル様。」

長椅子に寝転んだまま資料を見ていると、ルナリアがいつもより低い声を出した。

「何だ？」

「お風呂上がりに持ってきてしまって申し訳ありません。ですが、お願いしますからもう少しきちんとした姿勢でお読み下さい。」

「ここは俺の私室だ。たまにはくつろがせろ。」

「しかし…」

「ん？」

「私も女のはしくれです。」

「いや、はしくれなんて謙遜はするな。美人だぞ。」

ルナリアは美人だ。ハイエルフ特有の金色の目と、ヒュンと伸びた耳。

今は機嫌が悪いので、ライオンのような尾がはたと動いている。

「姿の美醜ではありません。」

たしなみってやつだよな、やっぱり。

「…わかったわかった。」

面倒だが身体を起こすと、浴衣を整えた。

「これでいいか？」

「はい。」

やっとルナリアの機嫌が治る。

「やはり…ナイラなんていう名前は無いな。」

「はい。そもそも、存在していたことが驚きです。」

「そうか…。親は賊に襲われたんだったな？」

「はい。子供は傍仕えと外出していたため無事だったようです。」

「なるほど。あわよくば皆殺し…しかし不思議だな。その子供が、

何故バルセロス一族の屋敷にいるんだ？」

「申し訳ありません、そこまでは…」

顔を伏せるルナリア。

「いや、上等だ。そこまで解ったなら気になるな。そのナイラとかいう子供。」

「名簿に加えておきますか？」

「ああ。頼む。」

「かしこまりました。では、失礼いたします。」

ルナリアが出て行った後、俺は深々と溜め息をついた。

子供選びがこんなに変だとは思わなかった。と、いうか、始まる前からこんな事件が起こると思ってもみなかった。

自分が選ばれた時は、気がついていたら選ばれていた。そんなものだと

思っていたのに。

「...。」

バルコニーに出ると、仄青い月明かりが射していた。

欄干に身体を預けると、ひんやりしていて気持ちがいい。

しかし、主教というのも因果なものだ。

時はファーンネル暦2713年のシルマ間の月。

夏に向かうこの時期は、昼が長くなる代わりに月がだんだん遠のいていくため、夜の闇が深くなっていく時期だ。

俺の住むヴェストファーレン王国は女王アイーナ5世が統治する平和な国。

つい先日、第一子であるのアンドロス王子が風の女神ミーティアの洗礼を受けて成人した。王権が交代する日も近いだろう。

ちなみに、国には三つの神殿がある。成功の神を祭る勝利宮と、豊穡と再生の神を祭る豊穡宮と、愛と芸術の神を祭る乙女宮と。

三つの神殿を仕切っているのは三大貴族と呼ばれる公爵達だ。

各神殿の最高位の神官は主教と呼ばれ、一族の当主がつとめている。で、俺は乙女宮の主教で、ついでにバルセロス公爵家の当主なわけだ。

乙女宮の主教は特殊な職業で、他の神殿の主教とは少し違う。

我が乙女宮の神殿に祭られている女神マリエルは、独占欲が強い。

主教が伴侶を持つのが許せないのだ。

自分以外の誰かが自分のモノの心を満たすのが、我慢ならないのだ。だから、乙女宮の主教は結婚が出来ないし、恋をすることも許されない。

主教は心をマリエルに差し出す。その代償として、主教である限り不老の身体を手に入れる。

「...。」

俺も、もう10年もこの姿のままだ。いい加減、跡継ぎを育てようと思い立って今回の行事が行われることになったのだ。

跡継ぎの子供は、一年で一番日が長い日に決めることになっている。

もう少ししたら、候補の子供達が沢山集まってきて：屋敷の中で暮らす。その期間は一週間。

主教に求められる条件は、文才、楽器、舞踊、容姿だ。歌も出来るに越したことはない。何より、芸事に秀でていることが求められる。俺は、確かに優秀だったようだが、少々生意気な子供だった。

母：どうか先代の主教は何を思って俺を選んだのか、俺は未だにわからない。

「…。」

一人で考えていてもどうしようもない。煮詰まるだけなので話し相手と呼ぶことにした。

いつものように、人指し指で紋様を描く。スペルを唱えながら描くと、軌跡が空中に残るのだ。

「お呼びですか？主。」

「暇か？」

現れた奴に尋ねると、物を申したいような目で見られた。

「呼ばれたら必ず出て来るのが精霊なの。」

文句を言いながら、俺の精霊は腰に手を当てた。

「今日は何の用？」

「うん：気になる餓鬼がいてな。」

「女の子？」

「…わからん。」

そういえば、どっちだか聞いていない。

「そう。まあ、どっちでもいいわ。で？その子をどうするの？」

「いや：どうするもこうするも：」

「じゃあ何で呼んだのよ。」

「ん：そうだな。たまには虎と過ごす夜もいい。散歩に行きたいんだ。」

「…：乗れば。」

やや不機嫌な顔で背中を向けたのは俺が使役してるフィंकって名前の精霊。

上半身は人間の女、下半身は虎の姿を持つ白虎の精霊だ。使役って言っても、実際は尻に敷かれている気がしなくもないんだが…。

精霊っていうのは魔術師という使い魔のようなもんだ。ある程度の法力が無いと従ってくれないから、大抵は上級神官が持っている。誰かから譲ってもらうか、自分で捕まえるかして精霊と契約を結ぶ。そうすると、自分の相棒になってくれるんだ。

「じゃ、出発。いつもの散歩道な。」

「しっかりつかまってね。」

フィンはバルコニーから庭に飛び降り、軽やかに着地した。さすが猫の親戚というべきか、ほとんど音がしない。

俺は、自分で精霊を捕まえに行った。先代は譲ってくれると言ったんだが、どうしても自分で捕まえたかったからな。

「ねえ。」

「ん？」

「で、そのナイラっていう子をどうするの？」

「…さあ？」

俺自身、どうすればいいのか解らない。

「さあって何よ。気になってるんでしょ？」

「ああ。」

虎の背に跨ったまま、俺は考えた。

存在が消されなかった子供。だからといって、そんなに気になる要因は無いはずなのに。

「その子を選ぶの？」

「まさか。何も知らないんだぞ。」

「そうよね。楽しみだわ。貴方がどんな子を選ぶのか。」

「そうか？」

「ええ。私は可愛い方がいいわね。」

「俺だって可愛い方がいいさ。そうだな…やっぱり将来が楽しみなのは女の子だ。美人は傍にいただけで嬉しい。」

「不純ねー…」

「いいや。美人は世界の宝だ。不純じゃあない。」

「…あ、そう。」

フィンは呆れた声で返事をし、肩をすくめた。

俺は、こいつと散歩してる時間が一番好きかもしれない。誰を気にするでもなく、ゆったりと時間が過ぎていく。

「なあ…」

「ん？」

「俺が親バカになったらどうする？」

「…妬くわね。」

「そうか。苛めるなよ。」

「…どうだか。」

「嫌な奴。」

「お陰様で。」

そんなやりとりをしていたら何だか眠くなってきた。

「眠い。」

「はいはい。すぐに戻るわ。放さないでね。」

フィンはそう告げると走り出した。

でも軽く、走るっていうより跳んでる感じだ。

「おやすみなさい。」

あっという間に部屋に着き、俺を下ろしてフィンは消えた。

あれから一週間、子供達が来た。俺は何をどうしたらいいのかわからなくて、初めの挨拶をしてから2日間ほどブラブラしている。

子供達がいるのは精霊殿という館で、俺が主教になる前に暮らしていたところだ。

ナイラの件は、フィンを頼んだ。いきなり俺が行っても無駄だろうし。…とか思ったのに、フィンはあっさり諦めた。

異様にカンが鋭いらしく、姿を消した状態なのに絶対にフィンの

方を向かないらしい。

「もう、いい。俺が行く。」

「だったら最初からそうしてよ！」

ブンブン怒るフィンをなだめ、館に向かう時間と段取りを、今朝決めた。

「主って計画性無いわよね。」

：耳の痛いお話で。

「子供は元気ですね。」

にこにこしているのはシオン。とにかく子供が好きだ。

「皆さん可愛らしくて。」

微笑み返したのはルナリア。

二人とも、ハイエルフだ。

午後の執務室は日が刺し込んで若干暑い。まあ、自分が窓を背にして机に向かっているのにも問題があるんだろうが。

いくら神殿の周囲を森が囲んでいても、木漏れ日は俺の後頭部に直撃だ。

「…楽しみだな。」

気乗りしない声で言うと、二人は顔を見合わせた。

「ご気分でも悪いのですか？」

ルナリアが顔色を伺ってくる。

「いや、少し暑いのと、そのせいで眠いだけだ。」

背中がぼかっと暑い。

でも、気乗りしないのはもちろん、そのせいだけではなくて。

本当は、こんな行事は見たくないというのが本音だ。

次期当主となるために子供達が競う…それはいい。ただ、その背景

を考えると憂鬱になる。

上っ面は笑いながら、腹の中では反対のことを考えている親類。自分の息のかかった子供を俺に選ばせようと蹴落としあう姿は醜い。連中の親権はなくなるというのに…。

辛いめを見るのは子供達なのだ。どれだけの人数が集まろうが選ばれるのは一人だけ。いちいち感傷に浸っていてはキリがない。

だが：相手は子供なのだ。未来の芽は摘みたくない。

「主教も遂に父親ですね。」

何だかシオンは嬉しそうだ。

「お前は子供が好きだな。」

「主教はお嫌いですか？」

「私は…どうなのだろうな。」

よく、わからない。嫌いではない。でも、好きというほどでもない。

「可愛らしいではありませんか。」

ルナリアがこちらを向く。

「…お前達、早く結婚したらいいのに。」

俺の何気ない言葉に、ルナリアは耳まで真っ赤になった。

「と、とんでもない…です。」

その言葉に、シオンが少し傷ついた顔をしつつ、やはり

「そうですよ。」

と言う。二人共素直ではない。

「シオン…」

俺は少々大げさにため息をつく。

「少しは素直になれ。本当にその気がないなら、俺がもうぞ。」

紙束を揃えていたルナリアの耳がピクリと動く。

「それは…」

眼鏡を押し上げながらシオンは俯いた。

「…。」

こっそりとシオンの様子を伺っているルナリアの姿が面白い。

「ま、いいか。」

半端に話を切って立ち上がる。

「未来の息子か娘の顔でも見てくるとしようか。」

『主教！』

二人が同時に非難の声を上げる。

「気にするな。大体、私は結婚出来んだろうが。」

『…。』

「じゃ、行ってくる。」

背中越しに手を振り、執務室を後にした。

2. 赤い花

移動方陣で屋敷へ戻り、普通の神官服に着替えてからフィंकを呼んだ。

「お呼びですか、主。」

「子供達がいるのは精霊殿だったな？」

虎の精霊はコクリと頷き、背を向けた。

「どうせ乗せろって言うんでしょ？」

ものわかりが良くて助かる。移動方陣は、自分の目で見える範囲か、印をつけておいた場所にしか行けない。

精霊殿なんて久しく行っていないし、印も無いし、歩くには遠いし。

「ご名答。さすが我が精霊。」

背中に跨ると、フィंकはため息をついて走りだした。

「精霊殿ってあそこでしょ？この前まで主の部屋があったところ。」

「おい、この前って、10年も前だぞ。」

「あら？」

これだから時間の感覚が無い奴等は…。

まあ、あそこには俺の色々な思い出が詰まってる。嬉しかったことも、辛かったことも。

「どんな子を選ばれるのか楽しみだわ。主は面食いだから。」

「お前：いくら俺でも国の将来を顔で選んだりするわけないだろ。」

「そお？」

クスクス笑うフィंक。

「嫌な奴だな。」

「犬は飼い主に似るのよ。」

「お前って猫だろうが。」

そんなやりとりをしていると、目的地にたどり着いた。

「ああ、あと、もう一つ。」

「何なりと。」

フィンは大仰に腰を折る。

「俺が一人で行くのも妙だから一緒に来てくれ。」

「はい。」

まるで緊張感の無い返事だった。

「それから、人前では喋るなよ？いつもどおりに黙っててくれ。」

「：どうして？屋敷の中なのに。」

「お前が喋ると俺の威厳が損なわれる。」

「失礼な話。」

「本当の話だ。」

フィンは口を尖らせたが、黙って従った。

扉の横にある鐘を鳴らすと、すぐに侍女が現れる。

「どちら様でしょうか。」

首を傾げる侍女にニコリと微笑んで主教の証を見せる。

「私だ。」

「レ、レアル様：。」

「子供達の顔が見たくてな。忍んで来てしまった。」

「そ：そうでございますか。あの、こちらへ：。」

頬を染めた侍女が、そそくさと俺を中へ招き入れた。

自分で言うのも何だが、俺は中々の美男子だ。宮廷楽士の言葉を借りれば“紫眼の黒豹”。

要するに色が黒い：じゃなくて、浅黒い肌に赤紫色の目。髪は長いが目と同じ色だ。額には菱形の紋様が書いてある。

「：。」

フィンは何か言いたそうにこちらを見ていたが、気にはしない。

「こちらへ。」

客間に通され、俺は長椅子に座る。フィンは立ったままだ。まあ、座ろうと思っても椅子には座れないが。

少しすると、先ほどの侍女がお茶の用意を持ってやってきた。

ゆったりとした動作でポットから湯を注ぎ、ミルクと砂糖を混ぜて茶を煎れる。

カップに少し注いでくると回し、中身を傍らの小さな器に移して口に含む。

毒ではないと証明するための慣例だ。

「どうぞ。」

勧められるままにカップをとり、ちらりとフイंकを見ると頷きが返ってきた。

神の祝福を受けている主教は、ちょっとやそつとの毒では死なないが…苦しいものは苦しい。

一口含むと甘さがふわりと広がり、すぐに消えた。

「美味しいな。」

目を細めると、恥ずかしそうに侍女が答えた。

「あの、主教様は甘いものがあまり好きでないと聞いておりましたので、砂糖を少なくして、ミルクに花の蜜を少し加えました。」

「ほう、それは嬉しいな。ところで、名は何と？」

「クウォータと申します。」

俯く姿に出来るだけ優しく声を掛ける。

「クウォータ、そなたは気が利くな。よければ私付にならないか？」

「そ…そのように光栄な…。」

さらに俯く顔を見て

「…嫌か？」

と残念そうに眉をひそめると、クウォータはぶんぶんと首を振った。結わえた赤色の髪がぱたと動く。

「滅相もございません！」

「では来てくれるのだな？」

「は、はい！」

「それは良かった。」

笑いかけると

「あの！お代わりをお持ちしましょうか！？」

気まづくなったのか、いやに明るく、そしていかにも早く部屋から出たそうに訊いて来た。

ここは出してやるのが人情だろう。

「ああ、頼む。」

「少々お待ち下さい。」

クウォータが足早に出ていくと、待っていたようにフィंकが半眼で呟いた。

「…タラシ…。」

「うるさい。茶が美味しかったのは本当だし、あの娘を俺付きにすれば口煩い今の世話係をここの担当に…したらいかんな。」

「口煩いのは主が奇天烈なことばかりするからじゃないの？」
疑わしそうな視線。

「いいや、先日は羽ペンでダーツをしておただけなのに怒られた。」

「怒るに決まってるじゃない！ 使い方が根本的に違うわよっ。」

「…煮詰まってるんだ。大体な、結構難しいんだぞ？ 羽ペンってやつはふわふわしてて上手く飛ばない。」

「…もう、いいわ…。」

何故かフィंकが頭を抱えた。

と、そこに…

「お、来たな。」

微かな足音。

「お待たせいたしました。」

扉が開き、クウォータが入ってきた。

カップを片手に、この館の状況を訊く。

今のところ、ここには16人の子供と5人の世話係がいるらしい。

交代で4人ずつの面倒を見ているのだとか。

一応、生活態度も見るので世話は最低限にしかないことになっている。

「わかった。では、会いに行こう。」

席を立つと、

「ご案内致します。」

クウォータが立ち上がった。

「いや、いい。私はここに住んでいたこともあるし、そなたの休みを奪うのも悪いからな。私よりも子供達を頼む。」

「かしこまりました。」

クウオータはペコリと頭を下げた。

まず向かうのは中庭。この館で外遊びをするならここしかない。

：なるほど、数人ずつのグループになって遊んでいる。歩いて行くと、何人かが珍しそうに寄ってきた。

「こんにちは。ご機嫌麗しゅう。」

口々に言って頭を下げる。好奇心が強い子供達だ。大体、10歳前後だろうか。

寄ってこなかった子供達もちらちらとこちらを見ている。

「こんにちは。」

笑顔で答えると、一人の女の子が俺を見上げて言った。

「小父様はどなた？」

：少しだけ傷つく。俺の外見は25のときから変わっていないのに、小父様は酷いんじゃないだろうか。

「マリエル様に仕える神官だよ。」

「神官さん、そこにいるのは精霊？」

男の子が訊いてくる。女の子と顔が似ているような気がするが、親戚だろうか。

「ああ、虎の精霊さ。」

へえ：と言いながら、男の子はフィンクをまじまじと見た。

「赤紫の長髪に白虎の精霊：あなたはレアル様ですね？」

突然、新しい声が割って入った。

その途端、他の子供達が凍りつく。

そんな中、一人だけ悠然と歩み寄ってきた子供がいる。

「お目にかかれて光栄です。」

見たところ、12、3歳だろう。俺の前に跪き、衣の裾に口付けた少年：。

短めに整えた薄茶色の髪がさらりと揺れた。

「…。」

「我が師父

この上なく艶見事なるあでやか

の顔　ふさやかに豊かなる髪よ

振り乱しては煌く長き鎖

梳りては細雨に濡れし葡萄の房

こはまことに純血の

燦然たる褐色の息子

今ひとたび敬礼せよ

我らが高貴の黒豹に」

よく覚えたもんだな、こんな詩。初めて聴いたときは口から齒がなくなるかと思った。

「まさにその通りのお姿で驚きました。」

「…そうか。よく、覚えたな。」

笑いたくなるのを何とか抑え、名前を聞くとドラクムというらしい。

「お兄様…」

横から女の子が走ってきた。どうやら妹のようだ。

「失礼致します。どうした、リディア。」

ドラクムが振り返る。

「教えていただきたいことが…あら？そちらの方は？」

「リアル主教だ。」

「ま…あ、これは大変な失礼を…」

リディアは慌てて跪いた。

「気にするな。今日は少し遊びにきただけだ。」

笑いを浮かべ、リディアの頭を軽く撫でた。

「優秀な兄だな。」

「はいっ…！」

金髪の少女は嬉しそうに頷いた。

この兄妹は色素が薄い。たぶん、南の人間と別の地方の人間が両親なのだろう。

ついでなので、この場にいる全員の名前を聞いた。

「：16人と聞いていたのだが。」

咄くと、ドラクムが応えた。

「おそらく蔵書室でしょう。」

「そうか、では行ってくるのでしょうか。フィंक、少しこの子達と遊んでいてくれ。」

やはり、何か言いたそうなフィंकを無視する。

「大丈夫だ。敵意を持って接しないかぎり乱暴はしない。」

少し遠巻きに眺めている子供にも聞こえるように言い、蔵書室に向かう。

蔵書室にいたのは少し年かさの、十代も半の少年少女だった。さすがに落ち着きがあり、中庭で遊んでいた子供達とは一味違う。

ただ：自分の立場を具体的に理解しているらしく、何となく元気がなかった。

一人だけ決めるというのには無理があるような気がしてならないが、これもしきたり：仕方ない…。

と、いきなり大切なことを思い出した。まだ一番の目的に会っていない。

フィंकは青い髪だと言っていたが、そんな子供はいなかった気がする。

と、そこへ：

「…。」

噂をすれば：だ。ラトが頭を下げていった：ん？ちょっと待て。この館には候補者本人しか入れないんじゃないなかったか？
どうして世話係がいる？

「こら、お前。」

声を掛けると戻ってきた。

「何でしょう？」

「何故ここにいる？」

「はい、なにせまだ幼い方ですので特別に。」

「：そうか。で、お前の主人はどこにいる？」

「今はお部屋にいらっしゃいます。」

「起きているのか？」

「ええ、おそらく。」

じゃあ、決まりだ。俺はラトの後ろをついていった。

「ただいま戻りました。」

ラトは軽く扉を叩き、開けた。

部屋の奥、バルコニーに白い椅子とテーブルが置いてある。

その白い椅子の上に、こちらに背を向けて胡坐をかいている人影があった。

背中まであるくすんだ金髪が風にそよぎ、背景と相俟って幻想的な雰囲気醸し出している。

餌でもやっているのか、小鳥が欄干に止まり、リスが駆けていた。

小動物に好かれるということは、悪い奴ではないんだろう。しかし驚きだ。

「：お前の主は何歳だった？」

声を潜めてラトに訊く。

「今年で6歳になれます。」

「そうか：最近の子供は侮れんな。あんなにデカくて羽根までついてるのか。」

「違いますよ！」

冗談だったのに、真に受けたラトは大きな声を出す。

ぴゃっ！と小鳥が逃げていった。

「誰？」

続いて鈴を振ったような声がした。

「リアル様がお見えです。」

「：そう。」

つれない子供だ。しかし：それよりも：

「よせ。」

何か言おうとしたラトを制し、金髪の後ろ姿に近付いた。

隣に立ってみると、金髪のシルフの胸に背中を預け、膝を抱えてちょこんと座る女の子がいた。

肩には小さなリスが乗っている。仔リスだろう。

「レアル・バルセロスだ。」

「…。」

反応が無い。普通は名前を名乗るものだと思うんだが…。

「どうした？名乗るのが嫌か。」

子供は首を振って呟いた。

「本当の名前じゃないんでしょう？母さんが言ってた。レアルっていう名前は全部ウソだって。」

「そうか。」

味なことを言う。確かにレアルという名前は主教を引継ぐための名前だから、本名ではない。

昔から、乙女宮の主教は全員レアルなんだ。

「ならばもう一度言おうか。俺の名はエクシード。エクシード・バルセロスだ。」

「…ナイラ。ナイラ・アレクサンドリア」

ナイラが初めてこちらを向いた。

白磁のような白い肌に大きな藤色の瞳。肩口で切りそろえた髪は綺麗な青色だ。

その辺の役者絵より美しいかもしれない。ただ、表情は暗く、生気は感じられない。

「どうしたんだお前。俺が嫌いか？」

屈みこんで目線を合わせると、ナイラはまた目を伏せた。

「貴方が嫌いなんじゃない。ただ…」

「ただ？」

「…人間が嫌い…。」

…これは重症だ。両親が人間に殺されたからだろうか？

「ラトは？」

「ラトは、平気。ずっと、一緒だから。」

「そうか。」

俺は立ち上がり、目配せをした。ラトは頷き、ナイラに声を掛ける。察しの良い子だ。

「ナイラ様、湯殿が空いていましたが、いかがですか？」

ナイラは金髪のシルフを見上げた。そしてシルフが頷いて頭を撫でると、

「またね。」

と仔リスに頬を寄せて別れを告げ、ラトについて部屋を出て行った。

「…重症だな。」

俺の言葉にシルフが答えた。

「ああ、両親がいなくなってから、ずっとだ。」

「可哀想にな。ところでお前はナイラのシルフか？」

「シルフじゃない。天使だ。天使のブーツ。」

俺はブーツの左頬にある十字架の印を見て妙に納得した。

「バツ印だからか。」

「違う。」

「……。」

「……。」

意味の無い沈黙が流れたが、先に口を開いたのはブーツだった。

「あんた、主教なんだろ？ 凄い力を持ってるんだろ？ あいつ、何とかならないか？ このままだと…あいつの心が死んじゃう。」

「…。」

無言で欄干にもたれ、空を仰ぐ。

「俺に引き取ってもらうにはいくつかの条件がある。」

「何だ？」

「ふむ…。その1、見た目が良いこと。」

「文句は無いだろ、あの顔なら。」

まあ、確かに傾国の美女になれると思う。

「その2、マリエルは芸術の神だ。だから音痴は困る。」

「大丈夫だろう。両親は二人とも歌が上手かった。」

ダイムは笛の名手だったらしい。一度くらい聴いてみたかった。

「その3、腐っても主教だ。法力は人並み以上に使えないとな。」

「…そこはわからん。」

腕を組み、バーツを見つめる。

「幼すぎる…不利だな。」

バーツは低く唸った。

「まあ、安心しろ。年齢によって基準は違う。ああ、そうだ。お前、飛べるよな？」

「当たり前だ。馬鹿にするな。」

無然とした返事が返ってくる。

「じゃあ、今晚俺の部屋に来いよ。」

「は？」

「ナイラの話、詳しく聞きたいんだ。今夜は満月だろう？月が真南に来る時間に来てくれ。」

バルコニーに赤い花を飾っておくから。じゃあな。」

「お、おい！」

言うと同時に俺は欄干から飛び降りた。もうそろそろ帰らないとフインクが怒る。

着地する前に風を身体に纏わせる。

ふわり、と裏庭に降り、中庭へ向かった。

3. 来客

「楽しいか？」

中庭に入り、フィンクに近付いた。

『はい。』

目をキラキラさせて皆が頷く。フィンクは尾をくゆらせて座っていた。

「それは良かった。さて、今日はこのくらいで帰るか。」

精霊に向けられた言葉を聞いて、名残り惜しそうな顔がこちらを向く。

本来、精霊なんてものは高位の神官だけが持てるものだ。憧れる気持ちはよくわかる。俺も母の精霊が羨ましかったつけ。

「では、またな。」

別れを告げ、自分の部屋へ帰った。ま、戻るのは簡単だ。何せ自分の部屋だから、移動方陣で簡単に帰ることが出来る。

館の外に出ると、フィンクには軽く礼を言って帰した。

帰ってから、部屋をぐるりと見回す。寝台、本棚、飾り棚、テーブルの上の燭台：何の変哲も無い自分の部屋だ。問題は、赤い花。

どうやら飾っていない。世話係に頼んでおくか。

さて、夕食までには時間がある。と、いうわけで湯殿に向かうことにした。

移動方陣で帰って来たのでまだ屋敷の皆は俺が帰ったことを知らない。と、なれば。湯殿に向かうしかない。

一人でのんびり湯船に浸かるのは大好きだ。側女なんていないほう

がいい。

こっそりと湯殿に向かい、浴衣に着替えて湯船に身体を沈める。

「ふわぁ…」

手を組んで、頭の上に腕を伸ばして身体を伸ばす。
つるっ

身体を支えていた足が滑った。

「っ!？」

バランスを崩して頭から湯を被る。

「…。」

ほら、だから湯浴みは一人がいい。こんな時、脱衣所に誰か控えて
られたら慌てて様子を見に来る。

それでも、一人だ何だかつまらないのでフィंकを呼んでみた。

「んもう!何よ主!今度は背中でも流せっていうの!？」

不機嫌全開だ。ま、そりゃそうか。あれだけの人数を押し付けたし
な…。

「いや、今日は疲れただろうから洗ってやろうかと思って。」

「…。」

少しの沈黙のあと、不機嫌な顔がずいっと迫ってきた。

「何の冗談？」

「疑り深いな…。嘘なんてついてどうする。」

「…。」

「信じて。お前は本当に良い精霊だよ。感謝してる。」

目の前にあった山吹色の前髪を掻き上げ、額に軽く唇を押し当てた。

これは乙女宮の人間がよくやる行動で、相手を祝福したり、感謝や
親愛の情を表す仕草だ。

「そ、そう? まぁ、当然よね。」

心なしか嬉しそうに胸を張る精霊に

「ほら、俺がのぼせるから。」

と言って湯から上がる。

小さな椅子を引っ張り出して座ると、フィंकは俺の前に座った。

「しかしな：背中面積は絶対にお前のが広いから不公平だな。」
泡のついた布で縞を擦りながら愚痴ると、フィンはぷいっと明後日の方向を向いた。

「太ってるわけじゃないわよ。」

「いや、乗せてもらってるし、悪くはないけどな？…っていうか髪の毛が邪魔。上げろよ巻き毛。」

一房掴んで引いてみる。かなり伸びた。

「巻き巻き。」

素直に感想を言うと、尻尾でつつかれた。

「いいじゃない。主も長いでしょう。巻いたら？」

「冗談、俺が巻いたら国中のファンが泣くね。」

「…そうですか…へえ…」

ため息混じりにそう言うと、フィンは気持ち良さそうに伸びをした。

夜、今日は早めに仕事を切り上げた。

言った通り、バルコニーのテーブルの上には赤い花を生けた花瓶を置いておく。

真夜中、カタカタと窓が音を立てる。ブーツだろう。

カーテンを引いて…

「は？」

思わず間拔けな声を出してしまった。

「…来たぞ。」

ブーツはそこに立っていた。ただ…右手にはナイフを、左手にはラトを抱えている。

「仲がいいのか。」

うんうん、と俺が頷いていると、ブーツは顔をしかめた。

「成り行きだ。」

「ま、とにかく上がれよ。」

三人を部屋に入れ、棚から酒瓶を取り出してテーブルの上に置く。

「あー：ちょっと隠れてろ。」

カーテンの中に三人を隠すと、呼び鈴を鳴らした。

「いかがなさいました？」

すぐに侍女がやってくる。

「喉が渴いた。温かいミルクでも持って来てくれ。」

「かしこまりました。」

しばらく待つと、テーブルの上には湯気の立つポットが置かれていた。

扉が閉まるのを確認した後、三人を引っ張り出す。

「悪いな、何せ秘密の客だから。」

一応謝り、長椅子に座らせる。

「お前はこれでいいよな？」

バーツの前に置いたグラスに酒を注ぐ。

「ちび達はコレな。もう夜風は冷たいだろ？」

二つのカップにミルクを注いで蜂蜜を垂らす。

温かいカップを受け取り、ラトが頭を下げた。

「恐れ入ります。」

「：ありがとうございます。」

後からポツリと言ったのはナイラだ。

『：！！？』

ラトとバーツが目丸くしてナイラを見た。

「お礼くらい、ちゃんと言えるんだから：。」

小さな声で反論するナイラ。察するにこの子供、礼を言ったことが無いようだ。

：ここで『お前、礼を言ったことがナイラしいな。はっはっは。』等と言ってもシラケるのは確実なので黙ってしよう。

「何、いつもそんなに無愛想なのか？」

「いえ、私達には。」

「ま、他の奴等は礼なんて言いたくもないことしかないしな。」

「ふー：ん…。」

やっぱり、もらわれっ子は辛いんだろうな。

「それより、美味いか？」

杯を傾けながら尋ねると、ちび二人組はコクンと頷いた。

「よしよし。」

二人の頭を撫でると、ラトが身を引いた。

「もったいない。」

「あ？気にするな。大したご利益もないんだから。」

「いえ…。」

しかしなあ…一体いくつなんだこいつ。

「お前、年は？」

「9歳です。」

「げ…マジ？」

見えない。何だこの子供らしさの欠片もない態度…。

「しっかりしてんなあ。でも、あんまり無理はよくないぞ。あ、コレ。」

こっそり持ってきた軽食の皿を出す。

「好きに食え。」

「ありがとうございます。」

ラトが頭を下げ、ナイラに皿を勧めた。

「さ、ナイラ様。…ナイラ様？」

どうしたんだろう？ナイラはぼんやり座っていた。

俺が撫でたところに手をやり、髪感触を確かめるように触っている。

それからその手を下ろして呆然と手を見つめた。

「どうした？」

バーツが首を傾げ、ナイラに声を掛ける。

…反応が無い。

相変わらず、大きな藤色の目を皿のようにして掌を見つめている。

『…？』

ブーツとラトが何か言いたそーに俺を見た。

「何もしてないぞ？」

本当に何もしていない。

「…ないの？」

震える声が聞こえた。

「…は？」

思わず聞き返す。

「…恐くないの？触っちゃったよ…？」

「恐いって、お前が？」

ナイラが頷いた。

「何で恐い？ただのちび助だろうが。」

「ナイラ様に向かってちび助…！」

ラトが信じられないという顔をしたが、ブーツがなだめている。

「…そっか。ただのちび助…。」

「それがどうかしたのか？」

「ううん…何でもない。」

ナイラは首を横に振り、皿からクリームに乗ったクラッカーを取った。

「…これ好き。」

少しだけ頬を赤くして、ちらっと俺の目を見た。

「いただきます。」

サクサクと音を立てて食べる姿を、ラトは黙って見つめていた。

4. 再会

翌朝、薄暗いうちから起こされ、寝不足な俺は欠伸を噛み殺しながら朝礼を済ませた。ぼんやりと朝食の席についていると…

「レアル様、本日は…」

とシオンが長い巻物を読み上げた。

「…面倒だな。」

とぼやくと、

「仕方無いでしょう。人生に一度の一大行事ですよ。」

諦めろと笑われた。

「ああ、寝忙したい。」

「はい？寝坊ですか？」

「いや、寝忙。寝るのに忙しくなりたい。」

「無理ですね。二度と目覚めないように寝ないと。」

…物騒な。

「お前さ、優しそうな顔して時々とんでもないこと言うよな。」

「そうですか？」

心底意外そうな顔。

「自覚無いのかよ…。」

そんなこんなで一日が始まる。

神殿の最奥、そこが俺の仕事場。今日は儀式に駆り出されることなく、ひたすら資料を読むだけだ。

あのドラクムとリディアの兄妹はとても優秀だ。どの報告書を見ても誉めてある。まあ、所詮は他人の目なんだが…

それでも最有力候補であることに変わりはない。

「うー…ん…。」

唸っていると、ルナリアが入ってきた。

「主教、どうなさいました？」

「いや、難しくてな。お前は思う？」

そう言って紙束を差し出す。

ルナリアはそれを受け取り、目を通した。

「……。素晴らしいの一言に尽きます。この年齢でこれだけの能力とは。」

「そうか…やはりどちらかにするのが得策…か…。」

「何か問題でも？」

「いや。」

能力が早咲きという可能性も…

「ところで何の用だったんだ？」

「あ、そうでした。ご婦人がお目通りを願いたいとおっしゃっています。」

誰だ？今日はそんな予定は無かったし、貴婦人の懺悔という世間話に付き合う程暇じゃない。

「すまんが、今は忙しい。後日にもらってくれ。」

ルナリアは黙って一枚の紙を差し出した。

「拒まれたらこれを、と。」

「？」

受け取り、広げてみる。

そこには『暴れ猫』と書いてあった。

「裏から内密にお通ししてくれ。それから、人払いを。扉の外は前だけでいい。」

素早い切り返しにルナリアは驚いた顔をしたが、しばらくして一人の女性を連れて入ってきた。

「どうぞ。」

何となく、緊張してしまう。それは…別に目の前の女性が美人だからってわけじゃない。

「ありがとうございます。」

にっこりと微笑む緑色の瞳、長い桃色の髪を編んだ華奢な立ち姿。

男だったら思わず守ってやりたくなるような、そんな女性。でも：

「お久しぶりです。ご用は？」

座るなり、俺はいきなり訊いた。

「まあ：せっかちですね。」

相変わらず柔らかい笑顔でクスリと笑う彼女の現在の名前はエリン。

「やっと私の方が大きくなったのに、やはり負けてしまうなんて。」

そう、この女性は俺の母親、先代のレアル主教だ。

「大きく：は変ですよ。年が上になったんです。外見の。」

それにしても、俺より年下に見えて仕方がない。

「それもそうですね。相変わらず、私のノラは元気で嬉しいです。」

母は俺のことをノラと呼んだ。今となっては記憶も怪しいが、全く言うことを聞かない生意気小僧だったかららしい。

それが一変したのは一発殴られてからだ。

あの日のことは絶対に忘れない。いつも微笑んでいた母が俺に初めて泣き顔を見せた日。

：早く法力が使いたかった。早く一人前になって嫌味な親族を見返してやりたかった：。今から思えば、我ながら馬鹿だった。

召喚術に手を出すなんて。

召喚術は普通の精霊呼び出しと違い、契約していない精霊を無理やり引きずり出すのでよほどの法力がないと抵抗する精霊が暴れるから恐ろしい反動が来る。

俺のときも、召喚した精霊が暴れて引き裂かれそうになった時、偶然やってきた母が身を挺して助けてくれた。

左肩の肉が食い千切られ、骨が見えるほどの傷だった。俺は、身体が震えて、ただただ立ち尽くすだけだった。

気を失うほどの怪我だったのに母は踏み止まり、俺の頬を張った。

武術の訓練以外で殴られたのなんて初めてで：

母にあれほど厳しい口調で叱られたのも、あのときだけだった。

でも、激しい口調の後、俺の頭を抱きしめた手は、とても温かかった。

た。あの時まで、俺は人に大切に思われてるなんて思ってた。なかった。養っているのは主教の候補を育てるため、マリエルの相手を絶やさないうえに、俺は心を決めたんだ。二度とこんなことはしないって。もう、この人を泣かせるもんか……って。

ひょっとしたら初恋だったのかもしれない。ま、今から言えば、だけどな。

「もうノラっていう年でもありませんよ。」

「いいえ。いつまで経ってもあなたは私の可愛いノラですよ。」
軽く俺を睨むと、母は息をつき、本題を切り出した。

「跡継ぎは決まりましたか？」

なんてタイミングのいい人なんだろう。この行事は公にされないのに。

「よく今年だと解りましたね。」

「ええ。何となく。」

「実は思案中なのです。どうにも決めかねていまして。」
肩を落とす俺に、困った瞳が向けられる。

「あまり思い詰めないで下さいね。」

「あ。」

そういえば、ずっと訊きたかったことがあった。

唐突に顔を上げた俺を、不思議そうに見つめている目を見つめ返す。

「そう、母上は何故私を選んだのですか？」

「えっ？」

戸惑いの声が上がると、母は黙り込んだ。

「参考にさせていただきたいのです。教えて下さい。」

「……絶対に参考になりませんよ。」

「とにかく気になります。教えて下さい。」

深いため息が聞こえ、続いて小さな声がした。

「やんちゃでしたから……」

「はい？」

「一番ふてぶてしかったからです。」

言い終わると同時に浅黒い顔が朱に染まる。

「何故、そんな…。」

「きかんぼう程、実はしっかりしていると聞きました…ああ、絶対この子だ、と。」

「はあ…。」

あまりの理由に生返事しか出来ない。案外、適当なものなのかもしれない…。要は感覚だしな。

その後、母としばらく歓談し、今は昼食の入ったバスケットを持って神殿の外を歩いている。

早い話が執務室から逃げたわけだが、昼食くらい好きところで食べたっていいだろう。

神殿の周りはグルリと森があるので、参道を少し離れると、静かな森が楽しめる。

シオンやルナリアには秘密の場所で昼食開始だ。

(お。)

今日の昼食は肉の入ったパイだ。水筒に入った冷茶とよく合う。やっぱり冷茶は砂糖無しが一番美味い。

それに木の上とくればまた格別：

「リアル様！」

突然声を掛けられ驚いて下を見る。

白銀の髪をした少年がいた。

「何だ、どうした？」

「どうしたもこうしたありません。神殿に伺ったら手が放せないと言われました。」

で、ここに来たのか。やれやれ…。

「つけられてないだろうな？」

「もちろんです。」

「ん、ならばよし。上がって来いよ。」

「はい。」

登ってきて、俺の隣に座ったコイツはルーブル。王国の三大公爵家のひとつ、アンダルシア家の長男だ。要するに、次期主教。

成功と勝利を司る武神トライエを祭る勝利宮は、その名の通り武術が盛んだ。ルーブルの父であるターラー主教は一角獣の騎兵隊長だし、こいつも、まだ12なのに武人の卵をやっている。

三年くらい前、異母妹が産まれたときに名付け親を任されて以来、妹が可愛くて仕方ないらしい。

「歩いたのです！」

心底嬉しそうな声。

「私の見ている前で、初めて歩いたのですっ。」

「へえ。そりゃまためでたいじゃないか。ターラー殿も喜ぶだろうな。笑うかもしれないなあ。」

ルーブルの父親は表情があまり変化しない。笑顔なんて、見た記憶があっただろうか。

「はい。それから、明日から竜の小屋に入っても良いという許しが出ました！」

「お、遂に出たか。聖騎士に一步近付いたな。めでたいめでたい。聖騎士というのはこの国の飛竜を扱う騎兵だ。優れた武術と法力、それに強い精神が必要とされる最も難しい騎兵だ。ルーブルは竜が大好きだし、素質もあるだろうし、頑張って欲しい。」

ひとしきり話すと、ルーブルは一言礼を言って帰って行った。

昼食も終わり（まだ食べていないとかいうどこかの少年に半分やったが）、もうそろそろ神殿に帰ろうとした矢先：

ピチチチチ：

一羽の小鳥が目の中の小枝にとまった。小鳥はじつと俺を見て、ま

た鳴く。

ピチチチチ：

「？」

しばらくにらめっこをしていると、すぐ側の空気がぐにやりと歪んだ。

刺客か！？

慌てて防御のスペルを唱えると、そこに現れたのはバーツだった。

「…。」

若干の拍子抜け。

「なんだ、お前か。」

ため息混じりに言うのと、例のごとく不機嫌そうな顔で話してきた。

「今晚また部屋に行く。同じ時間でいいか。」

「今晚！？おいおい、今晚は書類に潰されてる。」

「それはいつものことなんだろうが。」

…確かに。

「わかった。続きのことか？」

「たぶんな。」

たぶんってお前…自分が来るんだろうに。

「じゃあ。」

「おい！」

それだけ言うと、バーツは姿を消した。

ああ、ラトが来るのかもしれないな。昨日はすぐにナイラと一緒に寝かせてしまったから。

5. 信頼

「…あなたは…私の大切な子です。」

「わかっていますよ。そして、これからは自慢の息子になります。」

「まあ。」

少し笑う緑の瞳。

「…構わないのです。いつかは交代の儀が起こる。今、起こったっていいではないですか。」

知人が先立ったという知らせを受けるたび、ひっそりと涙していたことを俺は知っていた。

世の人々が欲する不老不死の肉体は…あまりいいものではないと思っただ。

「行って下さい。私は、大丈夫です。」

不死鳥である女神に自分の死を預けてしまうと、世界の摂理から外れてしまう。それは、究極の仲間外れではないだろうか。

「許して下さい…弱い私を…許して下さい…」

俺の胸に顔をうずめた母を見て、俺は改めて女神の力を思い、ぞっとした。

本来なら50をとうに越えている身体は、未だに20前の娘だったのだから…。

あれから何年経っただろう？ 気がつけば、俺が子供を選ぶことになっている。

主教になったばかりのときは大変だった。

国王に仕えるようになって得たのは、多くの敵と少しの味方。新米だったから、よく文句も言われたし。

あと、これはあくまで個人的な見解だが、可愛らしい娘から男に代

わったからっていうのも一因な気がした。

他の二人の主教は男だったし、大臣がっかりする気持ちもわからなくはないけどな。俺が逆の立場でも多少はがっかりするだろうし。ま、今は慣れっこだから特に問題も無いが。

：そんなことを考えながら寝台に寝転がっていると、カタカタと音がした。

窓まで歩み寄り、カーテンを引く。そして驚いた。

「ちび助？」

バーツが抱えていたのはラトではなくナイラだった。

「側にいたいんだとさ。」

「おい！」

そんなわけのわからん理由で：

「ま、たぶんすぐに寝るから。」

バーツはナイラを降ろし、

「頼む。」

と耳打ちして行ってしまった。

「…あー…昨日と同じでいいか？」

なんとなく気まずくて。

でも、ちび助は黙って頷いた。

「じゃ、その長椅子に座ってな。」

そう言っただけで夕食を取りに行く。今日はホットミルクにビスケットだ。

「ほらよ。」

「ありがとう。」

カップに口をつけ、一口飲んで呟いた。

「…美味しい。」

「そうか、そりゃよかった。で、なんの用だ？」

今日は隣に座る。話をする方のこの方が楽だろう。相手の顔を見なくて済む。

「…。」

ナイラはしばらくモジモジしていたが、少しして顔を上げた。

「昨日の夜、僕のこと、ただのちび助って言ったよね？」

「ああ、言ったな。」

なんだ、それで怒ってんのか？

「…。」

「しかしお前、女の子なのに僕とか言うんだな。」

俺のその言葉で、ナイラは顔を上げた。

「男だもん。」

…うそだろ。これが男？5歳だったか？いや、でも、これで男？

「男の子だよ…。」

俺の思っていることが解ったのか、前を向いて膨れたまま呟く。

「悪かった。あんまり可愛かったから、はは…。」

とりあえず、本題に入ろう。

「で、そのちびがどうしたって？」

「僕のこと、ただのちび助に見える？」

「当たり前だろ？それ以外の何だ？」

カップにもう一度口をつけ、ナイラは俯いた。

「きたない…とか、ふきつだ…とか、思わないの？」

「…。」

なんてことだろう。

「何故？どうしてそう思う？」

俺の問いかけに、ナイラはぼつりと答えた。

「僕…変な子なんだって。バーツと友達だし、…尻尾があるし。」

尻尾があるのはエルフの特徴の一つだ。昔、ルナリアからきいた話だが、エルフの特徴は2種類ある。大きくは耳と尾だ。

ハーフには耳の、クウォーターには尾が特徴として残るらしい。

メリックがハーフエルフなら、息子に尾がつてもおかしくはない。

まあ…この家では変わっているが。

「でもね、でもね、僕、楽しかった。」

…にこりともせずと言うあたり…まあいい。

「…怖い人達が来る前まではね。」

「恐い人？」

「うん、ルピーとブーツと遊びに行ってたの。」

「ルピー？」

「えっと…ラトのこと。」

「ふむ。」

「帰ってきたら…」

カップを持つ小さな手に力が入り、肩が小刻みに震えていた。

「無理に話さない方がいい。」

ナイラはテーブルにカップを置き、膝を抱えた。

「…赤かったの…皆…真っ赤だった…」

泣きそうに声が震えている。

「笑ったの…赤くて光る……笑ったの…。」

俺は黙ってナイラの話に聞き入っていた。

「ルピーのほっぺたが真っ赤… ……ブーツがぎゅってしてくれて…。」

残酷な話だ。忘れていたって不思議じゃないのに…。

震えながら話しているが、涙はない。それが、余計に痛々しい。

「ちよっと落ち着け。な？」

背中を軽く叩き、カップを勧めた。ぬるくなっていたから、もちろん温めて。

「…ぷはあ…。」

ナイラは一つ息をつく。

「おじい様の家に行ってからわかったの。皆、僕のことを嫌いなんだって。」

昨日のブーツの言葉が思い返された。二人を眠らせた後の話だ。

『こいつな、綺麗だろ。だから余計に嫌われるんだよな。』

親馬鹿の類かと思ったが、確かに的を射た発言だった。

人間の中でも整った顔の多いバルセロス家の娘と、エルフの間の子

供。美男美女の夫婦だったんだろうな。

それと、ナイラが嫌われた理由の一つに、父のメリックがアーケエルフ系だったということも関わっているだろう。

シオンやルナリアのように、回復や治癒の力を使うハイエルフならともかく、アーケエルフは破壊の力を使う。

身体能力の強化など、どちらかといえばハイエルフに近いスペルを使うバルセロスの人間にとっては、アーケエルフの魔力は異端だ。

勝利宮の神官のように神の力を借りるならまだしも、魔力で物を破壊するなんて…。

もし、母よりも父の血が濃かったら、バルセロス家にいながら法力が使えないことになってしまう。

選民意識の塊な連中には耐えられないだろう。

そしてバーツの存在。ナイラの話によると、行き倒れていたところを助けたらしいが、これは精霊に相当する。

神官の中でも精霊を使役できるのは一部の高位の者だけだ。

精霊を使えるというだけで、強力な力の使い手だという証明になっている。

要するに、このちびは幼くして才色兼備だということだ。ま、こいつは男だが、女みたいだからよしとしよう。

：天は二物を与えず、というのは何処へ消えてしまったのだろう。ことん。

ナイラはテーブルにカップを置いたまま、静かに俯いている。

「来いよ。」

「え…？」

キョトンとした顔。

「いいから、こっち来い。」

手招きすると、少しこちらに寄ってきた。

「よっ…と。」

そのまま抱き上げて膝の上に乗せた。

…軽い。

何だか俺が悲しくなった。何を食ってたんだろう…。

この小さな背中に、どれだけの言葉を浴びてきたんだろう…。

「えっと…あの…。」

あたふたと慌てて降りようとするナイラ。俺は首根っこを掴んでそれを阻止した。

「バーツの膝の上ならいいのに、俺じゃ不満か？」

「う…んと、んと…ぜ、全然嫌じゃないけど、僕なんかが乗ったら主教さんが汚れちゃうんでしょ？」

「汚れるわけないだろう？お前、泥だらけなわけじゃないし。」

「…そうじゃなくて…人間に悪いことが起こるんでしょ？」

…何てデタラメを信じて…。いや、信じ込まされたのか。

「バアカ。んなことあるわけないだろ。」

くしゃくしゃと青い髪を掻き回す。

「で、でも…恐い人達が…」

「関係無い。」

思わず語気が荒くなった。

「…。」

「大体な、お前にそんな力があつたって俺には効かない。」

「…ホント？」

藤色の瞳が心配そうに見つめてきた。俺は出来るだけ優しく言い返す。

「本当だ。主教の力をナメるなよ？お前にたいなちびの呪いなんて効くもんか。」

女神様のご加護があるからな、と笑う俺に、ナイラは深く息をついた。

「そっか…。」

「で？他に言いたいことは？」

「ううん…でも、僕…帰りたくない…。」

「ここにいたいのか？」

「……。」

「何があった？」

「みんな、僕が嫌い……。おじい様も怒ってたし。」

「何て？」

「なんであんな奴を引き取った、って。穢れてるって、魔族の化け物だ……て。」

「ここで言っても仕方無いが、魔族と精霊は別物だ。」

「……他には？」

「仲良しだったリスの子が死んじゃったとき、新しいお母さんが言っただ。」

お前はお人形さんみたいな顔をしているのにどうして涙なんか流すの？……って。おかしいって。魔物に心なんか無いはずなのに……人形みたいな顔してるならいっそ人形でいればいい……って。悪魔のくせに泣いたり笑ったりするなって……汚らわしい……から。」

僕……もう、泣かない。笑わない。人形で、いい……。」

頬を押さえる仕草……きつと、爪を立てられたんだろう。」

それからのナイラの話は悲惨の一言に尽きた。

怒りっぱなしの祖父母、冷たい叔父と叔母、意地悪な従兄弟達……。バーツは結界で大半の力を奪われ、ラトは台所の隅で真冬も水仕事ばかりさせられていたらしい。

ナイラに与えられていたのは腐りかけの残飯のようなもの……。

「……すまない……。」

腕が勝手に小さな背中を抱きしめていた。

……情けない……エルフへの偏見がそこまで強かったのに、気づけなかった自分が本当に情けない。

「……どうしたの？何で主教さんが悲しい声するの？僕、また悪いことしちゃった？」

頬に触れている頭が少し動く。

「いや、悪くない。お前は何も悪くないんだ。」

悪いのは、俺だ。自分が見える部分だけ、整った環境にして慢心し

ていた：俺だ。

もう一度小さな身体を抱き上げ、こちら向きに座りなおさせる。

「辛かったのに、よく頑張ったな。」

もう一度、小さな身体を引き寄せるとナイラは照れたように下を向き、少し頬を染めた。

「僕ね：」

ナイラがまた口を開く。

「二人がいてくれて凄く嬉しい。これって、幸せっていうんでしょ？」

少し身体を離し、一心に見つめてくる。

「ああ、幸せだ。いい友達だよな。」

「そうだよな。だったら：大丈夫。僕は強い子だって父さんも言うてたし。」

「そうだな。お前はとっても強い子だ。」

頭を撫でると、ナイラは首をすくめた。

「主教さん、優しいヒト。僕：あれ？」

不思議そうに目元に触れる。

「あれ？涙が出る：泣かないって決めたのに：嫌だなあ：？」

「泣いていいんだお前は。無理しなくていい。思い切り泣いて思い切り笑え。」

キョトンとしている目を見て、そう言い聞かせた。

「でも、強い子は泣かないんでしょ？」

「あのな：涙ってのはあんまり我慢してるといつか突然溢れるんだぞ。お前の年で泣くのと俺の年で泣くのはどっちがカッコ悪い？」

「：主教さんかな：？」

「だろ？だったら今のうちに泣いとけ。」

「うん：でも、変なの。主教さんに、何でこんな話しちゃったんだろ：？ちび助って言ってもらいたかっただけだったのに。」

「まあ、いいじゃないか。おかげで俺達は仲良くなれただろ？」

椅子の背にもたれ、背中をさする。

「仲良し？」

「そう。」

「僕がさよならしても、覚えててくれる？」

「もちろん。でも、もう、あの家には帰らなくていいようにしてやる。」

「ホント？」

「ああ。もう、怖い思いはしなくていい。」

「そっか…」

それを言い終えると同時に、俺のシャツに大粒の涙がこぼれた。

「恐かったよな？…辛かったよな？」

「うん、うん…。」

しゃくりあげながら、ナイラは何度も頷いた。

「恐かったよう…恐かった…よ…」

しがみついて泣きじゃくるナイラの背中を、ただただ撫でてやることしか、俺には出来なかった。

6. 決意

「…気が済んだか？」

どれくらいそうしていただろう。俺が額をつつくと、まだ少し鳴咽を漏らしながらも頷いた。

「うわ、べたべた…泣いたな…。」

文句を垂れつつ胸からちびこいのを引き剥がし、衣装棚から新しい服を取り出した。

「顔、拭かないとな。」

水差しの水を湯に変え、手拭布を浸して絞る。

「目えつぶれよ。」

まずちび助の顔を拭き、続いてシャツを脱いで自分の身体を拭く。

「よし。」

新しいシャツを着て再び長椅子に座ると、ちび助が服の裾を掴んだ。

「子供はもう寝ろ。寝台貸してやるから。」

「…沢山昼寝してきた。」

と、首を横に振る。

「ひょっとして、寂しいのか？」

「…。」

当たりらしい。まあ、仕方ないか。

「じゃあ、これでどうだ？」

近くに置いてあったライラをとり、静かな曲を弾いてやる。

最初は興味深そうに見ていたが、少しすると寝てしまった。

「フィンク。」

小声で呼ぶと、こっそり出てきた。全く、ノリのいい精霊だ。

「悪いんだが、こいつを部屋まで頼む。」

「いいわよ。可愛い子ね。」

「食うなよ。」

「馬鹿言わないで。」

寝顔を見て目を細め、フィंकはナイラを抱えて行った。

翌日から、俺は候補の子供達と直接話す期間に入った。

俺が喋る端からシオンとルナリアが記録していく。

皆、利発な子だったが、特に感心したのはやはりドラクムとリディアの兄妹だ。

ほぼ全ての質問に対して完璧な答えが返って来る。

妹は心から兄を尊敬していて、自分が兄の目の前に出るなんてありえない：と思っているようなので、やはり選ぶならドラクムか。

ナイラは、夜のことが嘘のように黙りこくっていた。俯いたまま、必要最低限の言葉しか発しない。

まあ、小さいなら小さいなりに色々あるだろう。

とにかく、喋り通しで疲れる一日だった。

夜も遅くなり、やっと寝室にたどり着く。

前の二日が睡眠不足だというのに：。寝台の上に転がり、見るともなく天蓋を見つめる。

ナイラは：どこにやればいいだろう？俺の力の及ぶ範囲はバルセロス一族だ。

でも、バルセロス家の人間は、大半がエルフに良い感情を持っていない。

そんな偏見の中に置いておくのは忍びない。どこか別の場所へ：

そうだ。たしか豊饒宮のレト主教が孤児院を持っていたはずだ。

彼が妻と一緒に面倒を見ている孤児院なら安心だろう。二人共おおらかで優しいし、のびのび暮らせるだろう。

カタカタカタ：

窓が鳴る。

こんな時間に尋ねて来る奴は一人しかいないな。

「今日は何だ。」

カーテンを引くと、今回はブーツだけだった。

「いや：礼が言いたくてな。」

「礼？」

「あいつ、少しだけ明るくなった気がするんだ。お前のお陰だろう
と思っただけな。」

「別に何もしちゃいないさ。あのちびが昔話をしてたただけだ。」

「昔話？したのか？：お前に？」

「悪いかな？」

心底意外そうな顔をされるとなかなか傷つく。

「いや、別に。あいつ、とんでもなく人間不信だったのに：。お前、
人間かな？」

疑わしそうな目。

「失礼なこと言うな。」

「まあ、いい。」

「あいつに言っただけだったんだ。もう、今までいた家には帰らなくて
いいって。」

「：。」

「代わりに、もっとのびのび暮らせるところを用意しようと思う。」
「：そうか。」

ブーツは改めて俺の顔を見た。

「感謝する。」

「まあいい。今夜は眠いから帰ってくれ。」

「おい！人が真面目に礼を言っただけなのに：」
ボタン。

俺は窓を閉めた。

振り返らずに寝台に寝転がった。
外でブーツが文句を言っていたが、すぐに静かになった。

「お前みたいな変な人間に会えて良かった。もう会うことはないと思うが…。じゃあな。」

それだけ聞こえて気配が消える。

…今更、礼とか言われると変な気分になる…。

そんなこんなで色々しているうちに子供達は帰っていった。

あとは誰を迎えたかという報告書と、精霊殿の人事に忙殺されそうな日々。

そして半月後…

精霊殿の居間に俺の息子と世話係が到着した。

屋敷の中を一通り説明して、部屋へ案内する。

「今日からここがお前の部屋だ。好きに使っていいぞ。」

日当たりの良い二階の部屋。寝室と二間つづきになっている。

「ありがとうございます、父上。」

やや緊張した藤色の瞳に、俺は笑って答えた。

「お前の父親はメリックだろう？無理に父と呼ぶ必要はない。」

「でも…」

「そのかわり、今日から俺はお前の師匠だ。師匠と呼べ。」

「…はい！師匠！」

ナイラがにっこり笑った。やっぱりガキは笑ってんのが一番だな。

「それから、ラト。」

「は、はいっ。」

少し慌てた返事。

「お前は今日からルピーだ。ナイラの世話係の侍女になれ。」

「あの…」

申し訳なさそうに俯く。

「復讐なんて考えるな。今日からは俺がお前等の保護者だ。俺がやってやる。もちろん、ブーツも手伝ってくれるだろうし、な？」

バルコニーに目を向けると、欄干にブーツが座っていた。

「ああ。妙な結界もなくなって力も元通りだな。」

ニヤリと笑う顔と俺を交互に見て、ラトは目を丸くした。

「本当に…？」

「嘘じゃない。仇は討ってやる。」

その途端、ラトの顔が歪んで絨毯に染みが現れた。

「な？もういいだろ。」

復讐のため、少女である自分を棄てた…。

そんなことで人生が決まるなんて、あんまりだ。

茶色い髪をクシャ…と撫で、子供二人をせき立てる。

「さ、隣の寝室に着替えが置いてあるから着替えてこい。ルピー、お前のも一緒にあるぞ。」

『はい。』

二人が姿を消すと、俺はブーツの隣に行った。欄干にもたれて溜息をつく。

「…ったく、世話が焼ける…。」

「どうしてあいつを選んだ？」

怪訝な顔。

「んー：技術や知識だけならもっと良い奴もいたけどな…あのちびにはあって、そいつらには無いものがあったから、だな。」

長い髪をいじりながらポツリと話す。

「…何だ？」

「教えてたまるか。自分で考えろ。ま、いつも近くにいたらわからんかもな。」

俺がドラクムではなくナイラを選んだ理由…それは、ほんの些細なことだから。

自分の選択に悔いはない。…今は、目を瞑っていよう。この子に背

負わせてしまう使命のことは。

「ケチだな。」

「おお。ケチだとも。」

「…。」

「…。」

しばらく沈黙が流れた。

木葉が風にそよぐ音だけがきこえる。

「…師匠…。」

小さな声がした。二人が着替え終わったらしい。

「よう、着替えたか。」

しゃがんで手招きをし、二人を呼ぶ。

「これでお前達は俺の家族だな。」

ぱたぱたとやってきた二人の額に軽く唇をつける。

「歓迎するぞ。」

「うん！」

ナイラが飛び付いてきた。

ルピーはもじもじしている。

「ほら、お前も。」

手を差し延べると、ルピーもとびついてきた。

二人がぎゅうっとしがみついてくる。

「あ、こら。泣くなルピー。お前も…もらい泣きすんなよ…」
どうしてこうなるんだ？

ぼろぼろ泣く二人の背中をポンポンと叩きながらパーツを見上げた。
…笑いそうな顔をしている。

「…言いたい事があるなら言え。」

顔がほてる。

「お前…意外といい奴だな。あと、ガキ好みなのか？」

「意外じゃなく俺は優しい。それから、あれは挨拶みたいなもんだ。」

「？」

「知らなかった？あれは仲良しっていう挨拶なの。」

ルピーが説明する。

そうそう、で、祈りの言葉を添えると神官が行う場合は祝福になる。

「…変わってるな。」

バーツは顔をしかめた。

「ああ、バーツも家族か。だったらやらないのは変だよな？」

俺が尋ねると、二人は頷いた。

「…らしいぞ？ちょっと顔貸せ。」

「いや、いい…！」

俺が立ち上がると、バーツは凄い勢いで飛び退いた。

「俺はそんな習慣知らんからな！」

そしてそのまま姿を消す。

「…照れたのかな。」

ナイラが呟く。

いやあ、俺は断じて違うと思うがな。

そしてこっそり笑いを囁み殺した。

「腹減ったろ。今日は俺が作ってやる。」

「師匠、作れるの？」

「当たり前前だ。それくらい作れなくてどうする。」

「本当？楽しみ。何が出来るのかなあ？」

その一時間後、鍋から赤い煙が立って厨房が騒ぎになったが…それはまた別の話だ。

・エピローグ

「おしまい。」

ライラは一息ついた。

「…知らなかった…。」

フルートは下を向いたまま、ぼつりと呟く。

「ん？」

「何となくはわかってたよ。でも少し不思議だったの。私が知ってる話のナイラの詩は月影の詩だけ。」

あのナイラがどうしてそんなに世界が憎んでたのか。」

「…そうだね。でも、これだけが原因じゃないと思うよ。」

「まだ、あるの…？」

「思い返してみて。月影の詩のナイラは、どうだった？彼を破滅に追いやるうとしたのは何？」

「…。」

フルートは悲しそうに膝を抱えた。

「でもさ、」

ライラはフルートの顔を覗き込んだ。

「彼は常に不幸だったわけじゃないじゃない？人生なんて、いいことと悪いことはトントンなんだから。」

ほとんどの悲劇の伝承には、幸せな時期の描写なんて少ししかないよ。」

「…そうだね。」

「それより、お腹減ったよ。」

「え？」

気がつけば、日が傾きかけている。

「結構長いお話だったんだね。」

フルートは立ち上がり、服についた草を払った。

「夕飯、何にしようかな。何食べたい？」

「干し肉があったよね？お肉の料理がいいな。」

「はい。」

「ねえ、手伝うよ。」

ライラはフルートの後を追って立ち上がる。

「いいの。休んでて。」

「ケチ。」

「あ、じゃあお茶煎れるから飲んで。喉、渴いたよね？」

「そうだね。じゃあ、お茶でも飲みながら待ってようかな。」

「そう。それがいいよ。」

二人は籠を抱えて小屋へ向かう。

「ああ、でも、話し相手はお手伝いにならないよね？」

ライラの発言にフルートは少し考えた。

「まあ、ね。」

「勘ねないでよ。」

「ライラより寝坊したのが少し悔しいだけ。」

「もう！たまにはいいでしょ？」

ライラは頬を膨らませ、フルートを見る。

「何だか悔しいんだもん。」

「寝坊すけに寝かせといってもらったから？」

「：うん。」

「ちよっとひどくない？」

『：。』

ドアノブに手を掛けたまま、二人は睨み合った。

『：ぷっ：あははは：』

でもすぐに二人は笑い出す。

「じゃ、一緒に作る？」

「うん。」

ライラが頷くと、二人は仲良く小屋の中に入って行った。

e
n
d.

・エピソード（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2050b/>

二人の休日～不死鳥の羽根の下で～

2010年10月11日18時05分発行